



乙女ゲームの悪役なんて  
どこかで聞いた話ですが 1

柏てん  
Ten Kashiwa

RB

レジーナ文庫

エル

リズの妹。

アル

リズの弟。

リズ

リシェールが森で助けた  
ちよっぴり天然な女性。

カノープス

騎士団の副団長。  
仕事熱心で  
真面目だが、  
人付き合いが苦手。

シャナン

メイユーズ王国の王子。  
病に臥せるリシェールの  
もとに足繁く通う。

リシェール

乙女ゲーム世界に  
ヒロインのライバル  
として転生した少女。  
だけどひよんなことから  
悪役ルートの回避に  
成功して……？

ゲイル

騎士団員。ミハイルの側近。  
強面だが、おおらかで  
優しい性格。

ミハイル

騎士団員。戦術の天才。  
俺様気質で、周囲の人を  
よく振り回す。

シリウス

魔導省の長官。  
その正体は、  
天界から人間界に  
やってきたエルフ。

ヴィサーク

リシェールの  
契約精霊。

登場人物  
紹介

## 目次

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 1

7

書き下ろし番外編

エルフに思うこと

361

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 1

## 1 周目 貴族の娘

はじめまして。

わたくしはリシエール・メリス。

ファンタジー系乙女ゲーム『恋するパレット〜空に描く魔導の王国〜』の悪役です。

なんで自覚があるかって？

それは私が、その乙女ゲームの世界へ転生したからです。

前世の私は日本で生まれ育ちました。酸いも甘いも、とまではいかないものの、色々経験した二十五年間でした。

けれど車運転中、飛び出してきた子供を避けるためにハンドルを切ったら、電信柱につっこんで呆気なく死亡。次に気づいた時には、生前に携帯ゲーム機でプレイしていた『恋するパレット〜空に描く魔導の王国〜』、略して『恋バレ』の世界でリシエールとして生を受けていたのです。

『乙女ゲーム』とは、いわゆる女性向けの恋愛シミュレーションゲームの俗称ですね。プレイヤーはゲーム内の主人公を操り、好みの男性キャラクターとの恋愛成就を目指します。

恋バレの舞台は、魔力や精霊が存在するファンタジー世界。プレイヤーは主人公の通う名門のケントゥルム魔導学園で、攻略対象キャラと様々なイベントを通じて親しくなっていくきます。

ところが、主人公の恋のお相手となる攻略対象キャラには、それぞれ主人公のライバルとなるキャラクターがいます。

『リシエール・メリス』はそのライバルキャラの一人。主人公の恋路を邪魔する悪役なのです。

なんで、よりにもよって……  
何度その言葉が脳内を駆け巡ったことでしょう。

なぜなら、リシエールはその悪役の中でも、特別つらい過去を背負っているからです。彼女は貴族の庶子として下民街で生まれ育ち、五歳の時に流行病で母親を亡くします。その際ショックのあまり、秘められていた魔力を放出。凶らずも歴史に名を残す精霊、『西の猛き獅子』ヴィサークを呼び出し、その影響で下民街を壊滅状態にしてしまうのです。

そのあと、リシエールの莫大な魔力に目をつけた父親のメリス侯爵に引き取られるのですが、当然周囲の目は厳しいのなんの。

義母には冷たくされ、異母兄弟には無視される日々。使用人にさえいない者のように扱われます。

それだけならまだしも、とにかく力が強すぎて自分の魔力を制御することもできないのです。おかげで特に病気にかからずとも、その強すぎる魔力に体が耐え切れず、何日も熱を出して寝込んでしまうことも。

心細い毎日ですが、そこに優しい母親はもういません。

泣いて泣いて泣き尽くし、やがてリシエールは世界のすべてを憎むようになるのです。さらにはそれから十年後。ケントウルム魔導学園に通う彼女を悲劇が襲います。

リシエールと同じ魔導学園に入学した主人公は、魔導石という魔力を凝縮したアイテムの研究に励みつつ、見目麗しい攻略対象達といくつものイベントを経て愛情や友情を深めています。

そんな主人公のことを、リシエールの初恋の人が好きになってしまうのです。

彼は、リシエールが孤独で寂しさを抱えていた五歳の頃から、優しくしてくれる唯一の人でした。

自分と似たような出自でありながら養父に恵まれ、初恋の人に愛される主人公に嫉妬し、悪の道につき進んで死亡ENDをむかえてしまうリシエール……

……ふう、そろそろ堅苦しい話し方はやめようかな。

思うんだけどさ、主人公さえいなければ、リシエールはそこまで悪いやつにならないかったんじゃない？

あー、やだよ嫉妬なんて。疲れるだけだよ、チート主人公と自分を比べるとか。

前世で私は、女ばかりで人間関係ぐちゃぐちゃの職場に勤めていた。そんな私としては、もう嫉妬はするだけ無駄！ 他人のことは気にしないのが一番！ という意見を推したい。

そう簡単にいかないのも、わかっているんだけどね。

ちなみに私が前世の記憶を取り戻したのは、お母さんが亡くなって魔力を放出してしまっただけの時。

すんでのところで思い出して、本当によかった。

あわてて力の放出を制御したので、なんとか下民街には大きな被害を出さずに済んだ。とはいえ私の魔力は強大らしく、それに反応した精霊ヴィサークが私のもとに召喚さ

れてしまっていたのだけだ。

そして現在、実の父親に引き取られて一月の私はといえば、熱に魔うまされベッドに横たわり中。

西の猛たけき獅子ししヴィサクことヴィサ君は、獅子ししというだけあって元のサイズだと部屋に入りきらないほど大きい。なので子猫サイズになって、ほっぺをぺろぺろしてくれている。

初雪を思わせる柔らかな毛並みと、湖のように青く澄すんだ目。キャットフードのCMにだって出られそうなくらい上品な容貌ようぼうだ。

あーかわいい、すごくかわいい。でも舌がざらざらして熱くて、熱がある人間には正直逆効果だよ、ヴィサ君。そんなところも好きだけだね。

ひたすら熱に耐えていると、こんこんと扉がノックされた。一拍置いて、メイドと背の高い男が、だだっ広く殺風景な私の部屋に入ってくる。

彼の名はシリウス・イーグ。

ゲームに出てくる攻略対象キャラで、リシエールの初恋の相手である。

彼は今、背が高いだけで普通の青年に見える。でも、それは彼が魔導を使っているか

ら。彼の本当の姿はとっても美人さん。男でも、美人は美人だ。ちなみに魔導とは魔力を使う技術のことね。

ゲームで攻略対象キャラが抱いだく主人公への好意レベル——いわゆる好感度。これは、主人公の行動や発言によって変化し、数値化される。好感度を上げていけば、イベントが発生したり、ゆくゆくは恋人になれたりするのである。シリウスを攻略するルートでは、彼の主人公に対する好感度が三十パーセントを超えるとリシエールが登場し、彼を取り合うライバルイベントが発生する。

つまり、主人公がシリウスの好感度を上げなければイベントは起きず、リシエールは名前しか出てこない。そんな哀あはれなキャラこそ、私、リシエール・メリスだ。

ゲームではリシエールの叔父おじだと名乗るシリウスだが、その正体は不老不死のエルフ。本当は叔父おじじゃないことを、ゲームをプレイしていた私は知っている。しかも彼は、この国の魔力に関わるすべてを取り仕切る魔導省のお偉いさんである。

さて、メイドは少しでも私との接触を避さけるように、あわてて部屋を出ていった。お客様のシリウスにお茶の一つも出さないなんて、信じられない。

ちゃんとお客様はもてなせよ、接客失格！ と、大学時代に居酒屋バイトで培つちかわれたサービス精神が叫ぶけれど、幼い体は溢れる魔力でそれどころではない。

この世界の人間はみんな、魔力を持って生まれてくる。けれど、強い魔力への耐性があるのは、貴族と王家の血筋の者だけだ。魔力の強い者と弱い者の間に生まれた子供は、その魔力に体が耐えられない。よって、多くが第二次成長期を前に命を落としてしまうのだ。そういう訳で、一般的に貴族は貴族同士でしか結婚しないし、子供も作らない。

私が庶子だというのは……うん、レアケースなのだ。

私は強大な魔力の放出でたまたま精霊を呼び出した。だから父親は私が生き延びれば利用価値があるだろうと目をつけた。でもこの家での扱いを見れば、メリス家の人間はいつ死ぬかわからない私に肩入れしてもしょうがないと思っっていることが、嫌というほどわかってしまう。

シリウスはそんな中でただ一人、私を気にかけて様子を見て来てくれる相手だ。本当の血縁でもないのに、どうして頻繁に私を見舞ってくれるのだろう。

ゲームでは明らかになっていないなかったから、私はその理由を知らない。

尋ねることもできたけれど、私はそれをしなかった。母を亡くした私を支えてくれるのは、シリウスだ。もしも余計なことを尋ねて彼の気分を害したらと思うと、怖くても何も聞けなかった。

彼は私の額に手を置き、体からしゅるりと魔力を抜いてくれる。そのおかげで、暴れ

ていた強大な魔力が私の体でも耐えられる量まで減り、呼吸が楽になった。

涙でにじんだ目を瞬かせて見上げれば、いつも無表情な彼が不器用に微笑んでいた。

「調子はどうだ、リル」

彼はなぜか、出会った頃から私のことをリルと呼ぶ。

この世界で私を愛称で呼ぶのは、彼だけ。  
シリウスは私に寄り添うヴィサ君を右手で制し、左手に持ったハンカチで私の頬を拭いながら、甘く低い声で言った。

何度聞いてもいい声だ。

ゲームでは、とある大御所声優が彼の声を担当していた。

ゲーム世界が現実になった今も、彼の声はなんとその声なのだ。

こんなに優しくされたら……好きになって当然だろうが！ リシエールは悪くない！  
ゲーム内のリシエールに激しく同情しながら、私はこくりとうなずいた。

「シ……シリウス……叔父様……ありがとう……ございます」

私に優しくしないで、でもありがとうございます！

彼に恋して嫉妬にとらわれ、やがてライバルキャラに成り下がる——悪役落ちなんてしたくない私は、心の中で彼を拒む気持ちを抱きつつ、なんとかかそう言った。



喉はがらがらで、まともな声が出ないほど掠れている。  
 ヴィサ君が心配そうにくうーんと鳴いた。

ずっと気になってたんだけど、その鳴き声……お前は獅子でも猫でもなく、犬なのか。それとも見た目からしてシーサーか。

「無理に喋らずともよい。飲みなさい」

シリウスが枕元に用意されていた吸い飲みに呪文をつぶやく。吸い飲みに液体が満たされ、シリウスは手ずから口まで運んでくれた。

誘われるようにそれに吸いつくと、スポーツドリンクみたいなほどよい冷たさの飲み物が喉に流れこんできた。

夢中で液体を飲み、私は再びお礼を言うためにシリウスを見上げる。

しかし彼が私の目の上に手をかざして何らかの呪文を唱えた途端、私の意識は遠くなくなり、それは叶わなかった。

部屋の主が眠ってしまうと、シリウスは右手で不機嫌そうなヴィサークをいなしなながら、小さくため息をこぼした。

「潮時かもしれんな………いっそ攫うか」

不穏なつぶやきを落としたシリウスを、ヴィサークがフーフーと威嚇する。  
 シリウスはそんな精霊などそっちのけで、眠るリシエールの顔を見ていた。



今日も今日とて、私はベッドの中だ。

でも昨日シリウス叔父様が魔力を抜いてくれたので、比較的体調がいい。

開け放した窓から、キラキラと光の魔法粒子が降り注いでいるのが見える。  
 そこに薄水色をした風の魔法粒子が混じり、とても綺麗だ。

魔法粒子というのは、簡単にいうと魔力の粒のこと。魔力には色々な属性があり、それに伴った色を帯びている。ゲームでは重要なシーンでのみ見ることが出来るものだったので、実は詳しいことはよくわからない。ただ、いくら魔力があってもこれが見えない場合もあるのだとか。見えないと、魔導を使うことができないらしい。

魔法粒子を集めて、目的のために魔力を導くこと——それこそがこの国の『魔導』の基本だ。

懐かしいな。ゲームでは画面にタッチペンでそれぞれの属性に則したペンタクルとい

う凶案を描くと、主人公が魔導を使うことができた。

主人公の持つ、魔導石精製の道具はパレットの形をしている。ゲームのタイトルもこの道具を意識して『恋するパレット〜空に描く魔導の王国〜』。

他の乙女ゲームとちよつと違うのは、主人公の魔力属性パラメーターを上げなければならぬところ。各攻略対象の持つ属性を上げること、好感度も上がる仕組みになっている。

発売前に公式サイトを見た時は、タイトルのダサさに「これはないわな」とパソコン画面の前で呆れた。今ではいい思い出だ。

舞台設定もベタベタで、中世ヨーロッパ風の石畳の街並みや実用性そちのけの萌え重視の衣装。さらに、メラニンに一体何が起こったとつこみたくなる華やかな髪と目の色。それもこの国ではごく普通のことだ。むしろ日本では一般的な黒髪に、地味な灰色の目をした私のような人は少なく、貴族ではほぼ見られない。

というか、悪役だから黒という安直なキャラデザに、イラストレーターの手抜きを感じる。

私だって、ゲーム世界に転生するならいつそシルバーとか、日本人じゃありえないような髪色がよかった！ この容姿に生まれて五年が経ち、もうすっかり諦めはついてい

るけれど。

それに、庶民として生きるならこのぐらい地味なほうが都合だ。

私は主人公を引き立てて没落していく悪役にはなりたくないの、もう少し成長したら王都を離れるつもり。

私を厄介者扱いしている義母達はそのほうが喜ぶだろうし、私もこんな場所にはいたくない。碌に顔を合わせたことのない父親には、未練などない。

子供がどうやって一人で生きていくんだ？ と、世の中の大人には考えが甘いと言われるだろう。けれど、私だって五歳まで治安最悪の下民街で生きてきた。しかも前世の二十五年分の記憶まである。やってできないことはない、はずだ。

それに、どうにもならないと嘆くより、どうにかしようと意気込むほうが建設的だ。ま、肝心の体調がよくならなければ、ゲームがはじまる十年後を前に、私はこの世界から退場になりかねないけどね。

どうして私がそこまでしてリシエールの運命から逃れたいかという、それにはゲームのある特殊な事情が大きく関係している。

恋パレは、主人公が魔導学園に入学したところからはじまる。

主人公はなぜか精霊に嫌われていて、魔法粒子を上手く集めることができない。その

せいで魔導の成績はイマイチ、というマイナスのステータスから物語はスタートする。あ、ちなみにその謎はゲーム終盤に解き明かされるのだが。

それはさておき、主人公は魔導石を生成する魔導技師として、類稀なる才能を持っている。主人公の養父は魔導石を作る魔導技師のギルド長で、彼のおかげで主人公は恵まれた生活を送っていた。魔導石というのは、魔法粒子が高密度で含まれている魔石を加工して作るアイテムのこと。これを使うと、魔力が弱い人でも魔導を使うことができる優れたものなのである。主人公の持つパレットは、魔導石を生成する際に使う魔導技師専用の道具だ。

ゲームで魔導石を作る時に、どんな魔力を込めるか。それは魔導を使う時と同様ゲーム画面上にタッチペンで描いたペンタクルによって決定されていた。

よみがえった前世の記憶には、ゲームを進めるために覚えたペンタクルがぼつちり残っている。

ゲームのプレイ内容も、攻略したルートはほとんど覚えていようだ。興味のないことはちつとも頭に入ってこないくせに、ゲームの知識は克明に覚えているなんて、自分で自分に呆れてしまう。

とにかく、恋パレはそういったファンタジー要素が受けて、ファン層が厚い人気ゲー

ムだった。

しかしこのゲームには、実は一般のファンにはあまり知られていない、いわくがある。もともと恋パレは無名の同人サークルが製作し、じわじわと人気が出たゲームだ。しかしその頃は、プレイヤーが選ぶ主人公の行動によってストーリー展開が変わるだけの、単純なベルゲームだったと聞いている。私はゲームがメジャーになってからのファンなので、同人版を実際にプレイしたことはない。すでに販売が終了していたし、中古でもプレミア価格となっていて、やりたくてもできなかったというのが実情だ。

なので攻略ブログや情報提供サイトから得た知識にすぎないのだが、初期の恋パレはどうも、一部プレイヤーから『ヤンデレ矯正ゲーム』と呼ばれていたらしい。

初期の恋パレでは、まずファンタジー世界のイケメンと付き合う。そして、やがてヤンデレ化する彼らの手綱を締め、いかに問題を起こさせずに学園を卒業できるかを楽しむという、乙女ゲームの王道をちょっと……いやかなりハズしたところに主軸が置かれたゲームだったようだ。

しかもエンディングの中には残酷なものも多かったらしく、『絶対に商業化できないゲーム』として名を馳せていたらしい。

それが、ファンタジアアドベンチャーというカテゴリーで大人気ゲーム機に移植され

たのだから驚きた。

さて、実際にゲーム世界に転生してしまった今、この点について無関心ではいられない。なぜなら、ここが同人版の世界であるのか、それとも私がプレイしたほうの世界なのか、現時点では判断がつかないからだ。

もしここが初期のゲーム世界だった場合、攻略対象達は必ずヤンデレ化してしまうことになる。

攻略対象には、この国の王太子や宰相、將軍に魔導省を司るエルフまでいるというのに。

聞いた話では、王太子が乱心して国を崩壊させたり、將軍がヒロインほしさに内乱を起こしたり、宰相が他国に寝返って戦争になったりと、国を巻きこんでの愛憎劇が繰り広げられるのだそうだ。シリウスのルートでは、主人公のために、小さい頃からかわいがっていた姪——つまり私——を陰惨な方法で殺すシナリオまであるらしい。

まったく冗談ではない。

なぜ、他人の恋愛の巻き添えを食らって殺されにやならんのだ！

一体全体、どうしてそんなゲーム作ったんだらうか。

恐怖や怒りを感じつつ、私はできるだけだけ物事をいいほうに考えようとした。

とりあえず将来の不安は置いておいて、この屋敷を出たら自分に何ができるのか考えしてみる。

前世では二十五年間、特出したところのない平凡な人生を送った。そんな私は、何を糧にしたら生計を立てられるだらうか？

リシエールのチート能力といえば、ヴィサ君がいることと強大な魔力があることくらいだ。しかし、魔力は今のところ、私の体調を悪化させるだけの逆チート能力に成り下がっている。

……あれ？

魔力があるということも、もしかしてペンタクルを描けば魔導が使える、のか？

私は恐る恐る、痩せ細った小さな指を持ち上げて、覚えていたペンタクルを空中に描いてみた。

うん。何も起きない。

まあ、そう簡単にはいきませんよね。みんなが十年も二十年もかけて、学校で習得するものでもんね。

うう、誰もいないけど、できるかもって調子に乗った自分が恥ずかしい。ヴィサ君が散歩に出かけていてよかった。見られるのは嫌だもんね。

そう思っていたのだが――

「何してる!」

部屋に大声が響いて私はぎよっとした。

メイドの、感情を排した静かな声に慣れていた私は、大きな音への耐性がなくなっていたらしい。

声のしたほうを見ると、やけにきらきらしい格好をした金髪の子供が、窓枠から身を乗り出してこちらを見ていた。

そのぱっちりとした青緑あおどりの目には、警戒の色が宿やどっている。人の部屋を覗のぞいておいて警戒するなんて、身勝手な子供である。

一瞬、無視してやろうかとも思ったが、人との会話に飢うえていたのだろう。私の口からは、自然と言葉がこぼれていた。

「あなた、だれ?」

「誰とは無礼な。礼儀も知らないのか」

男の子でも、張り上げた幼い声はきんきんして耳障りみみざわりだ。それでも言葉をかけてもらったことに、少しにやけてしまった。この家の人達は、私を徹底的に無視するから。

「何を笑っている!」

彼は怒りながら窓枠を乗り越えようと、私のベッドの脇にやってきた。

「すみません。えーっと、ごめんなさい?」

この世界に生まれたあととは敬語で話す文化圏にいなかったもので、今使っている言語の敬語表現がわからずに困る。

うおー、元社会人としては屈辱くつじやくだ。

「謝意は理解したが……『ごめんなさい』とはなんだ?」

訝いぶしむ少年に、今度は私のほうが目を見開く。

「『ごめんなさい』は……すみませんの違う言い方です。お母さんが、悪いことをしたら心を込めて『ごめんなさい』と言いなさいって、教えてくれました」

そう言うと、少し鼻につんときた。

こちらの世界の母親は、病弱な私を女手一つで育ててくれた、優しくて剛毅ごうぎな女性だ。一緒に過ごした時間こそ少なかったが、私は彼女のことが大好きだった。

「ナターシャがか?」

少年の驚いた顔を見て、私は首を傾かしげる。

私の母親はそんな名前ではない。

「いいえ。私のお母さんはマリアンヌです」

「メリス卿にそんな名前の側室がいただろうか……」

「お母さんは、もう死にました。流行病で」

あえて感情を殺して言うのと、少年のほうが気まずそうな顔をした。

どうやら根は優しい少年らしい。

「……………かった」

「え？」

「悪かったと言っているんだ！ 余計なことを思い出させた」

「いいえ、あなたとお母さんの話ができて嬉しかったです。もう、お母さんのことは誰とも話しちゃいけないって、言われているから」

沈黙が二人の間に横たわる。

言ってから失敗したなと思った。こんな小さな子供に、責任を感じさせてしまった自分が情けない。

少年は、その幼さに似合わない気難しげな顔をしたあと、名案が浮かんだとでもいうようにこちらを見た。

「じゃあ、交換条件だ。私はお前に貴族らしい話し方を教えてやるから、お前は私に母親のことを話せ！」

「……………は？」

一瞬、何を言っているのか理解できずに、私は首を傾げた。

「それでは、私ばかり嬉しい状況になってしまいます。交換条件にはなりません」  
そう言うと、白くてまろい頬を少年がぶつくりと膨らませる。

「いいのだ！ 人に教えることで自分の復習にもなるし、私は常々じいやに『人の話はよく聞くように』と言われてる！」

ん？ それはそれで、何か違うかないか？  
私は思わず声をあげて笑ってしまった。

突然笑い出した私に、少年は目を白黒させている。

言葉を交わしたこの少しの時間で、私はこの不器用ながらも優しい少年に親しみを覚えた。

また話せたら嬉しいけれど、今日ほど体調のいい日はそうそうない。きっとそれが叶う日は来ないだろう。

「名前、教えてください。私はリシエール」

「私はシヤナンだ。シヤナン・デイゴール・メイユーズ。特別にシヤナンと呼ぶことを



「許すぞ」

「はあ？」

私は今度こそ、驚きで言葉を失った。

いくら学がない私だって、この国の名前が『メイユーズ』だということぐらい知っている。

そして『シヤナン』は王太子の名前であることも。

さらに、よみがえった記憶によると、『シヤナン・ディゴール・メイユーズ』は、ゲームのパッケージに一番大きく描かれていた攻略対象だった。

私がプレイしたルートでは、リシエールが王子と接触するエピソードはなかったのに、なぜ出会ってしまったんだろう。

私はゲームのシナリオには関わらずに、悪役ルートから外れて生きていきたいと切望している。なのに、どうして……

びっくりやら悲しいやらで黙りこむと、私が喜ぶと思っていたらしいシヤナンは怒りだした。

私は作り笑いでそれをかわし、どうにか穩便おんべんに彼と距離を置かなければと、強い疲労感を覚えながら考えた。

\* ❖ \*

それから王子は、暇ひまを見つけては私の部屋の窓辺に立つようになった。彼の気配を感じると、ヴィサ君はすつと消えてしまう。どうも騒さわがしいのが嫌いらしい。体調は日によってまちまちだが、なぜか王子と会うようになってから少し調子がいい気がする。

私の話を聞くと言った割に自分の話ばかりする彼のが、嫌いじゃなかった。

王子の目線で語られる王宮は、とても美しく楽しい場所だ。

本当はそれだけではないことをゲーム経験者の私は知っているが、王子は決して誰かの悪口を言ったり、愚痴ぐちをこぼしたりしなかった。

まだ七歳と幼くても、彼には確かな矜持きやうぢがあるのだろう。

王子に教えてもらって、私の敬語はだいぶ上達した。

でも私が王子に対してそれを遣つかうと、彼は嫌な顔をする。

なんなんだ、一体。

代わりと言ってはなんだけれど、王子は私の遣つかう下民街げみんがいの言葉を少し覚えた。

悪ぶってそれを遣つかってみる王子は、精神年齢二十五歳の私からすればかわいすぎできゅんきゅんする。

自分がどれほど人との会話に飢うえていたのか、王子と出会って初めて気がついた。

王子の話すくだらない話には声をあげて笑い、時には手を叩いた。

そんな私を、王子はとても満足そうに見ていた。

穏やかな時間が流れる。

まるで夢のように。

ここが乙女ゲームの世界で、自分が実父に嫌われた子供で、いつか妬たみに支配され悪役になる運命だなんて、とても思えなかった。

彼が帰ってしまうと、がらんとした部屋で、私はいつも現実に引き戻される。

そのたびにもう彼に会ってはいけないと思ひ、でももう少しだけ惜おしくなる。

王子はゲームの攻略対象キャラだから、いつか主人公が現れたら彼女を好きになつてしまうかもしれない。シリウスのように。

対する私は、ゲームのシナリオでは王子と関わりすらない。

そう考えるたび、私の心は沈みこむ。

仲良くなつてはいけない。好きだと思つてはいけない。



乙女ゲームの悪役なんて、本当につまらない役回りだ。

\* ❖ \*

夢を見ている。

何度も見たことのある夢だ。

夢の中で、私は誰かに呼ばれている。

その誰かのいる場所は遠い。

強く引き合い、そして突き放される。

辿りつきたい。なにもに出会いたくない。

相反する意識が交差する。

充満する魔力と、混乱して乱舞する粒子。

静謐な光と、遥かなる世界のざわめき。

混濁した意識の中で、私は強い願いを抱く。

『……もう二度と、××になんてなりたくない』

強く願っているはずなのに、いつもその願いを思い出せない。

菌痒い想いと倦怠感で、自らも魔力の渦に呑みこまれそうになる。

いっそ、その渦に呑こまれれば楽なのか。

すべてを大いなる力に委ねてしまおうと、自分という存在を捨てようとして——  
けれど。

毎回その瞬間に、目が覚めてしまう。

そして目が覚めるといつも泣いている。

現実引き戻された安心感と、結局また辿りつくことのできなかつた虚無感で、私は  
がらんどどうになる。

そして私は、その願いを忘れてしまう。

大切なことなのに——……



「おい！」

涙でにじむ視界に、きんきらと光を纏う髪（ま）の毛が飛びこんできた。

幼さの残る顔が厳しい表情を浮かべている。

それが誰なのか、一瞬思い出せなかった。

そして自分が、誰なのか……

「しつかりしろ！」

両肩を掴まれ、びくりと体が震える。ベッドに横たわる私の上にいたのは、王子だった。どくどくという心臓の音と、荒い息。キーンという耳鳴りが頭に響く。

私の体調は最悪のようだ。

強大な魔力が体内でうねっている。久々の強い発作だ。苦しさに耐え切れなくて、私は呻いた。

身を振って王子の手を振りほどこうとするが、強い力でそれを阻止される。

王子が押しつけてきた掌は、莫大な魔力を吸い出していく。

私の魔力を吸いこんでいる王子は、とても苦しそうだ。

はっとした。

こんなことをしちゃ、だめだ！

「殿下！ やめてください！ 無事では済みません！」

「うるさい！ 病人は黙ってろ！」

黙る訳にはいかない。

彼が私に施しているのは、他人の魔力に干渉する魔導。

彼は両手を私の肩に押し当てて自分の魔力をこちらに流しこみ、暴走する魔力の流れを無理やり制御しようとしている。

私より二つ、三つ年上なだけの王子にできる術ではない。

ゲームの中で、この術に失敗して廃人になった人もいるとモブキャラが話していた。それがどれほど危険か、魔導を習っていない私にだってわかる。

もしも王子がそうなってしまったらと思えば、私はぞっとした。

「やめてください！ 私にそんな価値なんてない！ 殿下に何かあったら、私は……」

『私は』、なんだというのだろう。王子に何かあったら私が責められる——などと、浅ましい考えが脳裏をよぎる。

必死に自分を救おうとしてくれている人を前に、私は何を考えているのだろう。そんな自分の醜さが嫌になる。

「私は……」

——何より、私は王子に傷ついてほしくない。

そうだ。彼が王子であるから、ということ以上に、廃人となってもう二度と笑ってくれないなんて、考えたくもなかった。

自分が死ぬのは嫌だが、彼に身代わりになってほしいと願うほど、私は堕ちてはいない。しかし、彼を止めようとする私に喝が飛ぶ。

「価値なんて関係あるか！ 苦しむ者を助けるのは、人として当然だろう……むしろ、民を助けるのは王族の役目ではないのか!？」

「そんな……」

あまりにも真摯な王子の目に、私は言葉を失う。

彼はなんて清廉なのだろう。

もし前世でゲーム画面越しにこの光景を見ていたら、「若造が」とせせら笑ったかもしれない。でも実際に自分に向けられた眼差しは、胸に迫るものがあった。

将来王となった時には、その責任を投げ打って一国民の命を優先するなんて許されな

い。そう思いながらも、否応なく私の胸は熱くなる。

母が死んで、私は今、誰からも必要とされていない。

それがずっと悲しかった。

内心では強がりながらも、いつも居場所をほしがっていた自分はなんて浅ましかったのだろう。

急速に心が引き寄せられていく。

この人に王になってほしい。

そんな想いがこみあげてきた。

彼には人を導くために一番重要な、君主の資質が備わっている！

どれほど時間が経ったのか。

王子は大きく息を吐いて、私の肩から手を離した。

あれほどつらかったというのに、体が軽い。

私の体内で暴れていた魔力は、今はその奥底で大人しくしているようだ。冷えた頬の上を、私の目からこぼれた熱い涙が伝っていく。

「殿下……」

「シヤナンと呼べと……言っただろう……」

荒々しい呼吸を繰り返しながら、王子は困ったように笑った。

ああ、シリウスといい、王子といい、どうして私に優しくしてくれる人は攻略対象なのだろう。

ゲームの主要キャラになんて、絶対関わりたくない。慕<sup>した</sup>っても、将来つらい目に遭<sup>あ</sup>うのは目に見えている。

いつか、邪<sup>じやくん</sup>険にされるかもしれないのに……

「シヤナン様。私、あなたのお役に立ちたいです」

気づくと、そんな言葉が唇からこぼれ落ちていた。

それを聞いて、王子は呆<sup>あき</sup>れたような、けれどもとても嬉しそうな顔をした。

「つまらないことは考えるな。今は休め」

そう言って私の頭を撫<sup>な</sup>でる小さな手は、燃えるように熱い。

「殿下！ 手が熱いです。すぐにお医者様を」

「いい……誰にも、何も言うな。俺は帰るから……」

汗だくになっていた王子は、言葉に反してベッドから崩れ落ちた。

私は大きすぎるベッドから飛び下り、彼の頭を自分の膝にのせる。

「王子！ しっかりしてください。王子！ やだ……」

「ちよつと……眠いだけだ……心配ないから……」

「でも……！」

その時、普段はメイド達しか使わない扉が勢いよく開かれた。

「何を騒いでいるの、下民<sup>げみん</sup>の子が忌々<sup>いまいま</sup>しい。自分の立場がわかっているのですか！」

甲<sup>かんだか</sup>高い声をあげたのは、私の義母でメリス侯爵夫人のナターシャだった。

ひどく苛<sup>いらだ</sup>立しげに部屋に入ってきた彼女だが、私達二人の姿を見て目の色を変える。

「シヤナン殿下！ どうなさいました！ なぜここに……」

王子の傍<sup>かたわ</sup>らに膝をつき狼狽<sup>ろうばい</sup>したかと思えば、ぎらりと私のことをにらむ。

「あなた、殿下に何をしたのです！ 貴族の風上にも置けない。これだから下民<sup>げみん</sup>を家に

入れるのなんて嫌だったのよ！」

「申し訳ありません。いくらでも謝りますし、ご不快なら姿を消しますから、早く王子

を……」

涙ながらに言う私に、義母は嫌悪感を顕<sup>あら</sup>わにした。

「言われなくてもそうするわ。メリダ、医師<sup>あ</sup>を呼びなさい。殿下を貴賓室<sup>きひん</sup>へ運んで

付き添っていた侍女に言いつけ、彼女はすつくと立ち上がる。

少し痩せすぎているが、ナターシャは年齢を感じさせず、きびきびとして美しい。でも目はいつも吊り上がっていて、何かにつけて下民を見下す血統主義なところが苦手だ。

私の母親とはまったく違うタイプで、ナターシャに初めて会った時、侯爵がどうして私の母に手をつけたのかちよつとわかった気がした。

侍女に抱きかかえられて、王子が連れていかれてしまう。

私は、見ていることしかできない自分の無力さに打ちのめされた。

義母は激しい怒りを抑えきれないというように、絨毯に膝をつく私を蹴りあげる。腹部に衝撃を受けて、軽い体がおもしろいほど吹き飛ばされた。

「殿下を害するなんて、王の臣たる貴族には決して許されないことよ。どういふつもりなの！」

「ごほ……もうしわけ……ありません、お母さま……」

「母などと呼ばないで。不愉快だわ。今からあなたは、我が家にまったく関係のない人間よ。名前も何もかも捨てなさい」

「……え？」

朦朧とする意識の中で、私は赤いドレスを着た美しい女を見上げた。

彼女はその容姿とは裏腹に、醜悪な魔女のように見える。

魔女はにやりと微笑んだ。

「殿下を害する人間なんて、我がメリス家には初めからいなかった。殿下は我が家の庭で体調を崩していたところを、私が偶然保護したのよ。夫には、あなたが死んだと伝えましょう。死にかけのあなたなど、手を下すまでもないわ。出ていきなさい。そして二度と戻らないで。メリスという姓も、リシエールという名前も捨てなさい。あなたはもうただの、汚らわしい下民なのよ」

そう吐き捨てて、彼女は部屋を出ていった。

義母に申しつけられたのか、メイドが一人部屋に入ってくる。

私に近づくメイドをぼやけた視界で見つめながら、何より王子が無事であればいいと願った。

## 2 周目 迷子

夢うつつの状態で馬車に乘せられ、いつの間にか捨てられていたらしい。気づくと私は森の中にいた。

鬱蒼<sup>うつそう</sup>としてはいるが、密林というほどではない。木々の間からはオレンジ色の陽が差していた。感覚が戻ってきた私の肌に、草がちくちくと刺さる。

ご丁寧なことに、私は平民が着る麻のような服に着替えさせられていた。下民<sup>げみん</sup>として生まれた私からすれば、麻でも充分上等な衣<sup>ころも</sup>なのだけでも。

どれぐらい眠っていたのだろうか。全身が重い。顔に温かさを感じて目をやると、いつからそこにいたのか、ヴィサ君が私の頬を舐<sup>な</sup>めていた。

ヴィサ君。気持ちはありがたいんだけど、涎<sup>よだれ</sup>だらけになるからやめてくれ。体を起こした私は、腹部に痛みを感じて呻<sup>うめ</sup>く。

それにしても、わざわざ森まで捨てに来るとは。

近くには荷物も何もない。よって、食べ物も水もお金もない。五歳児をこんな場所に放置するなんて、向こうは私を始末するつもりだったんだな。

どうやら今は夕方らしく、草木の生い茂る森は少しずつ暗さを増していく。

アウトドアはからきしな私だって、森には夜行性の獣<sup>けもの</sup>が多く、昼より夜のほうが危険なことぐらい知っている。

「五歳でいきなりゲームオーバーか」

自分を鼓舞<sup>こぶ</sup>するためにちょっと茶化<sup>ちやく</sup>して言ってみたが、背中を嫌な汗<sup>あせ</sup>が伝<sup>つた</sup>った。

王子のおかげで、魔力による不調はない。

だからといって、夜の森を攻略するノウハウがある訳でもないんだけど。

私は最後に見た苦しそうな王子を思い出し、彼のその後が気になった。

ヴィサ君を抱<sup>かか</sup>えながら、両手を合わせて彼の無事を祈る。

せっかく助けてくれた命ですが、もしかしたら死んでしまうかもしれません。

けどもし無事にこの森を出ることができたら、私は王子に会いに行きます。そして絶対に恩返しをします。

そう心に決めて、私は立ち上がった。

圧倒的に不利な状況だが、あんな意地悪義母の思い通りになるのだけは嫌だった。

『そしてリシエル・メリスは何もかもを失い、森で朽ち果てましたとさ。　　（完）』

という訳にもいかないので、気を取り直して現状と装備の確認をしておきたいと思う。ゲームなら、リセットボタンを押して直前のセーブデータをロードすればいい。だけどこれは現実なので、そんなことはできないのだ。

「まずは……と」

体調はすこぶる良好で、常に体に付き纏っていた怠さはない。今にも体から溢れ出そうだった強大な魔力が、私を生かす活力として正常に体を巡っているのがわかる。とりあえず、すぐにでも行き倒れになりかねない状態ではなかった。

光月——日本の三月——の終わりにしては、暖かい日だ。

この国にも日本のような四季がある。それは全部で九の色月と、光月、闇月、色濁月の三つの月によつて構成されている。

月の順番は、灰月、白月、光月、黄月、緑月、青月、紫月、赤月、橙月、黒月、闇月、色濁月。灰月は、日本でいう一月だ。

春が訪れはじめた光月の森は、木や光の粒子が湧き立っていた。

身に着けている麻のような質感の服には、なんの特徴もない。この世界ではまだ紡績業が発達していないらしく、生地はざらざらとしていて、ところどころにだまがある。それでも下民街出身の私にとっては、上等な服。厚さも充分にあり、今日は寒さに苦しまずに済みそうだ。

しかし、腕の中にはヴィサ君一匹だけ。

ロルンインシヤム。

RPGでももう少し恵まれたスタートだろうと思いつながら、私はため息を吐いた。

必死に平静を保とうとするが、遠くから犬——考えたくないが、もしくは狼のような獣の遠吠えが聞こえてきて、ここが人間のテリトリーではないことがひしひしと感じられる。

私はちらりと、精霊界・ネコ目・獅子科・イヌ属のシーサーと思われるヴィサ君を見た。つぶらな目で私を見上げるヴィサ君は、危機感など欠片も感じていない様子。むしろ遊んでほしいと言わんばかりに、しっぽを振っている。

ヴィサ君は、五歳児の私が両手でやっと抱えられるくらい大きさだ。毛色は全身白で、ところどころに銀色のトラに似た模様入り。耳はライオン、しっぽはシーサーのようふわっと丸まっている。目はネコそのもので、瞳孔が縦長の銀目だ。ちなみに銀目というのは、ブルー系の光彩のことである。

彼を見ていると、前世で飼っていたスピッツ犬を思い出して困る。

どんな危機的な状態でも、「ああかわいい」となってしまう。

「あつ、ヴィサ君が……、うーん……ないか」

一瞬、彼がなんとかしてくれるんじゃない、なんて甘い考えが浮かぶが、すぐにそれを打ち消した。

『西の猛き獅子』という御大層な異名を持つヴィサ君。

でも実は、彼がどうい存在でどんな力を持っているのかを、私は詳しく知らない。

この世界の私はまだ五歳児で、未就学児。その上真つ当な教育を受けたことがなく、下民街では魔力や精霊とはほとんど関わらずに暮らしてきた。

精霊の守護などの不可思議な力は、この世界では魔力も知識もある貴族や聖職者だけが享受できる。貧しく身分の低い者は、その恩恵に与れない。そしてゲームで描かれていた以上に、この世界では身分の差が激しかった。

魔導についてはゲームの知識がよみがえったので概要はわかる。しかし精霊については、主人公が精霊に嫌われていたこともあり、あまり登場しなかったから、『そういうものがいる』ぐらいしか知らない。

これは参った。

ファンブックや追加コンテンツを購入していれば、もしかしたらそれに関する情報があったのかもしれないが、今となってはあとの祭りである。

シリウスがお見舞いに来てくれた時、ヴィサ君の力は封じてあると言っていた気もする。でもその時の私は意識が朦朧としていたので、詳しい話を聞くことができなかった。

ゲームの中では、大型ヴィサ君がリシエールにけしかけられて、主人公に襲いかかったりするシーンもあった。そして見事に返り討ちにされていた。もともと、プレイヤーが各属性のパラメーターを規定値まで上げていないと、その場でヴィサ君に負けてゲームオーバーになる仕様ではあったんだけども。

ゲームについて考えこんでいると、私はあることに気がついた。

「あれ、もしかして私、悪役ルートから外れた……?」

義母は名前を捨てろ、もうメリス家とは何の関係もないと言っていた。そして私を死んだことにする、とも。

つまり私はもう貴族でもなんでもなく、ケントウルム魔導学園には通わずに済む。このまま国外脱出してしまえば、物語に関わる可能性が低くなるのではないか。

あれほど嫌がっていた悪役ルートから、私はなんの努力もせず外れることができたようだ。



まあ、身体的にも、精神的にも受けたダメージは大きかったが。

「はは……そっかあ」

嬉しいんだか悲しいんだか。

私は乾いた笑いのあとに、脱力のため息をこぼした。

悪役ルートから外れたいと願っていた。

そのはずなのに、今はちっとも嬉しくない。

一瞬でもそばにいたいと思った人が、王都にいるからだ。

——私は甘かったのかもしれない。

離れても平気だなんて、嘘だ。

シリウス叔父様にもう一度会いたいし、絶対に王子の役に立つ人間になりたい。

小さな手をぎゅっと握りしめ、私は一步を踏み出した。

この一步が、私の新しい人生。

リシエル・メリスなんて仰々しい名前きょうげきょうは捨ててしまおう。呼ばれるならあの名前

がいい。

ただの「リル」としての、第一歩だ。

——と、決意を新たに歩き出したところまではよかったが、私は道のりの険げしさにすぐ青くなった。

だって今の私の体は、五歳児なのだ。

頭が重い。コンパスも小さい。何より臥ふせていたせいで、筋力も体力もない。

これで夜の森を攻略するなど、端はなから無理だ。

体力を温存しようと、まずは休める場所や水場、食べられそうな果物を探す。

野獣避けに、できれば火も焚たきたい。

私の武器は知識のみ。それを使ってどうにかこの状況を切り抜けなければ。

森は光の魔法粒子に代わり、闇の魔法粒子が充滿しはじめていた。

下民街げみがいやメリス邸けいにいる時には気づかなかったが、普段人のいない場所は、人のいる

場所に比べて圧倒的に魔法粒子の密度が濃厚だった。たくさんの魔法粒子が舞っている

光景を見ると、酔ってしまいそうになる。

単体ならば綺麗な魔法粒子も、自然が多い場所では複雑に混ざり合って区別がつか

ない。

たまに吹く風には水色の粒子がついている。草木からは緑、大地からは土色、暗がり

からは艶つやのない黒の粒つぶが溢れ出る。

闇色が濃い今、とても不気味に感じられた。  
ふと、見覚えのある赤い粒子が風に乗って流れてくる。  
パチパチと音がしそうな、火の粉のような炎の粒子だ。  
なら、そちらに炎に関連するものがあるということか。

ゲーム知識だけでは心もとないが、確か炎を使う動物は地球と一緒に人間だけだったはず。

つまりこの先にいるのは、人間もしくは炎の属性を持つ何か。

私は足を止め、躊躇した。

人間だとして、夜の森に分け入るのはどういう人だろう？

私と同じように迷いこんでいるのならいい。でも、たとえば盗賊とか、密猟者とか……  
おおつびらに言えないような職業の人である可能性も大だ。

それでも人ならまだいい。これももし炎の精霊だったら……

私の下民街で培った経験からすれば、炎の属性を持つ人は概して気性が荒かったり、喧嘩っ早かったりする。もしその傾向が、精霊にも適用されるとしたら？

戦う術のない私が精霊に攻撃などされたら、ひとたまりもない。

比喩でもなんでもなく、赤子の手をひねるように、簡単にやられてしまうだろう。

ごくりと唾を呑みこんで考える。

どうせこのままここにいたって、野垂れ死んでしまう。

ならば少しでも可能性のあるほうに賭けるべきだ。

私は意を決して、その粒子が流れてくる方向に歩きはじめた。

——結果。

そこにはガラの悪いお兄さん達が、たくさんたむろっていましたとき、チャンチャン。やばい、早くも死亡フラグが立っている。

私は絶え絶えになった息をひそめながら、ヴィサ君を抱きしめて彼の動きを封じた。気づいた時にはすでに遅し。私は彼らのキャンプに近づきすぎていた。

急いでここまで来たこともあり、私の足はがくがく震えてしばらくはまともに歩けそうにない。

とりあえず体が小さいことを生かして、はいはいで木の陰に隠れた。

木を挟んで三メートルほどの距離を取り、キャンプをこっそり窺う。彼らは酒を呷りながら、愉快そうに話しこんでいた。

「それにしても今回は、ウマイ仕事だった。あの狸のツラ、見たかよ？」